
超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Golm side story

風音 ツバキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess side story

【Nコード】

N9693Y

【作者名】

風音 ツバキ

【あらすじ】

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess of lost memoriesのサイドストーリー集です。

主にゲハピクのイベントやオリジナルを書いていくと思います！

風邪引き女神（前書き）

夜のテンションで思いついたのを書いたらこうなったのでござる。

ステ×フウ百合注意です！

時間軸は女神失踪 原作開始の間です。

風邪引き女神

「けほっ…けほっ…はあ、無理し過ぎたかなあ…」

とある日の出来事。

わたしは、修行で無理をしましてって風邪を引いてしまった。

朝起きた時から頭がぼーっとしていて、朝ごはんを食べてる途中で倒れちゃったのだ。

それで、ミナさんに自室に運ばれて今日は安静にするようにと言われた。

はあ…三人に心配かけちゃったなあ…

それにしても、女神も風邪引くんだなあ…

なんて、どうでもいいことを考えていると、部屋の扉がコンコン、とノックされる。

「けほっ…どうぞー」

咳き込みながらそう言うと、入ってきたのはステラだった。

「あ、ステラ…どうしたの…?」

「いやあ、フウちゃんが心配になってねー」

どうやらステラはわたしを心配して様子を見に来てくれたみたい。

「そうなの…? でも、うつしちゃうと悪いから余り近寄らない方がいいよー…」

「ん、そだね」

そう答えながらも、何故かベッドに腰掛けてくるステラ。

…そういえば、二人はどこに行ったんだろ?

「ね…ステラ。ロムちゃんとラムちゃんはどこ行ったの?」

「二人ならミナちゃんに頼まれておつかいに行ったよ。二人ともフウちゃんのこと心配してたけどね」

「そう、なんだ…けほっ…」

やっぱりみんなに心配かけちゃってるなあ…ダメだな、わたし…

「大丈夫？　そういえば薬は飲んだの？」

「はあ…ふえ…？　く、薬？」

「…その顔はまだ飲んで無いんだね」

うぐっ…バレちゃった…

うう…あの風邪薬、すっごく苦いからイヤなんだよね…

「ダメだよ？　ちゃんと飲まなきゃ直るものも直んなくなっちゃうよ」

「う〜…でも、苦いのイヤなんだもん…」

自分でも子供だなあって思う。けどアレだけはホントにイヤ。

「ほら、良薬口に苦しって言うでしょ？」

「それでもヤなものはやなのっ！　けほっこほっ！」

「あー、ほら。安静にしてなきゃダメだよ」

「うー…」

身体を起こしてムキになっちゃっていたら咳き込んでしまい、ステラに横になるように言われ、横になる。

う…また、頭がぼーっとしてきた…

「ふ、フウちゃん？ 大丈夫？」

「だ、大丈夫…」

「ああもつ、無茶するから悪化しちゃったんだよ…もつ…」

朦朧としていく意識の中、視界の隅でステラが何かをしている姿が見えた。

「ステラ…？ なにしてるの…？」

「んー、苦いんなら、甘くしちゃえばいいって思ってねー。フウちゃん、ちよつと起きれる？」

「う、うん…」

何をやる気なのかさっぱりわからないまま、言われたとおりにまた身体を起こす。

「それじゃ、行くよー」

「行ってくて何を…んむっ!?!」

それは突然の出来事で、一体何が起こったのかよくわからなかった。

「ん…む…んう…」

「…ッ…んんう…! むう…ッ!」

ただ、ステラの顔がすっごく近くにあって、口が塞がれて、すっごく苦い物がわたしの口に流し込まれた、ということだけはわかった。流し込まれていく苦い味に、思わず涙が零れそうになる。

7

「…ぷあっ! げほっけほっ…! な、なにするのっ…!」

「だって、フウちゃん苦いの嫌なんでしょ? だからちよっとでも気を紛らわそうと思って」

そう答えるステラの目にも、うっすらと涙が浮かんでいた。

「だ、ただだからって、その、なんで口移しなのさっ…! 風邪うつっちゃうよ…!」

「これしか思いつかなかつたんだもん。それに、私は魔導書だから風邪なんて引かないよ」

「そ、そういう問題じゃなくて…!」

うう…なんだか余計に身体が熱くなった気がするよ…

「っと、フウちゃん汗かいてるね。ちゃんと拭かないとまた悪化しちゃう」

「ちょ、ステラ…っ!?! 何しようとしてるの…!?!」

「フウちゃん風邪でまだばーっとしてるでしょ? それに薬が効いてきたら眠くなっちゃうだろうから、私が拭いてあげるよ」

「いやいやっ…! それくらい自分でできるってばあ…!」

そう言っつて必死に抵抗してみるけど、やっぱり風邪のせいでうまく力が入らなくて、パジャマを脱がされてしまう。

「ほら、大した抵抗もできないくらいなんでしょ? だからフウちゃんは楽にしていいいんだよ」

ステラはそう言っつて、あるうことかわたしの身体をペロリと舐めてきた。

「ひゃうっ！ す、ステラ…！？ 何して…くうんっ…！？」

「んむ…何って、フウちゃんの汗を拭いてるんだよ」

「んく…っ…ふ、拭くにしたって…あうっ！ 何も舐めなくなっ
…っ…ひうっ…！」

「拭くもの取って来てる間に悪くなったら大変でしょ？」

「だか、らってえ…はうう…んっ…」

だ、ダメ…なんか、力が入らないよお…

「すてらあ…もういい…もうだいじょうぶだよお…」

「んちゆ…大丈夫じゃないよ、まだ汗まみれだよ」

「やあ…だめ…汚いよお…」

「そんなことないよ、ほら、安静にしてて」

「ぶあうっ…！ あ…やつ…す、すてらあ…」

「…あ…う…?」

気が付くと、わたしはベッドで布団をかけられて眠っていた。

時計を見てみると針は朝の七時を刺していて、あれは夢だったのか、と思いかける。

だけど、日付を見ると一日経っていて、やっぱりホントにあったことなのかなあーと思って顔が熱くなる

昨日の出来事はもう途中から頭がぼーっとして全身の力も入らなくて意識も朦朧として、よくわからないうちに意識がなくなっていたので臆気にしか覚えていない。

でも、すっごく恥ずかしい目にあったということだけは覚えている。

「んっ…」

でも熱はホントにあったのか、と言う感じがするくらいになくなっていて、身体も軽くなっていた。

風邪って薬飲んで安静にしてたら一日で直るものなのかなーなんて思っていると、部屋の椅子に誰かがいるのに気が付いた。

「あ…ステラ…」

椅子に座っていたのはステラで、とても気持ちよさそうに眠っていた。

きつと、昨日からずっと看病していてくれたのかもかもしれない。

「…でも、あれは恥ずかしすぎるよ…」

昨日のことを再び思い出して、また赤面。

…でも、ステラにはちゃんとお礼を言わないと、ね。

わたしはベッドから出て、椅子で眠るステラに近寄り、

「ありがとう、ステラ」

そう言って、ステラの頬にキスをした。

うう、眠っててもやっぱりちょっと恥ずかしいや、えへへ…

そんなことをしてまた顔が熱くなってきたので顔を洗おう、と思い、わたしはステラを残して部屋を後にした。

「…どういたしまして」

部屋を出るとき、後ろからそんな声が聞こえた気がした。

風邪引き女神（後書き）

ツバキ「……………」

黒フウ「……………」

ツバキ「……………これ、大丈夫かな…まだR - 18じゃないよね…?」

黒フウ「……………知らない…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9693y/>

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Golm side story

2011年11月29日02時47分発行